

<h1>長ろう校舎改築通信</h1>	平成21年6月29日 長野県長野ろう学校 校舎改築委員会	10
--------------------	------------------------------------	----

6月13日 原田先生の講演会報告

講師紹介：原田公人先生

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所の教育支援部にお勤め中。以前は、北海道の札幌聾学校他、北海道各地・アメリカのろう学校にも勤務の経験があり、札幌では校舎改築にも関わられています。

講演『聾教育の現状と課題 新しい聾学校作りに向けて』

聾教育について、共通認識をもつことが必要なので、先に話したい。その後、札幌の改築時の話しをしたい。

聴覚障害者への教育は、エジプトが起源という人もいます。16世紀にスペインのポンセ・ド・レオンが聾者への教育を始めた。聾学校の歴史は長いですが、時代と共に課題も変わるため、聾教育の専門性は常に変化し求められる内容も変わってきている。

成果の一つは、指導法の確立。今後、さらに継承・発展させることが大切。

文部科学省の視学官、宍戸先生の論文より、聾教育は早期発見後の保護者支援・医療との連携・言語指導をどう確立するかが問題になる。また、リテラシー（読みの指導）が大切である。また、基礎学力をどう高めるか。障害認識・心のケアも課題として残っている。聾学校の職員と保護者が一体となって支援することが大切。

1. 新校舎建設のコンセプト

校舎改築のコンセプトとは、1000年もつ聾学校。私は常に、いい学校とは何かいつも考えている。以前、アメリカの聾学校の見学に行った。ボストンのクラーク聾学校は、ベルのいた学校。ボストンからノースハンプトンまで遠かった。途中で会った老人に、クラーク聾学校について尋ねると、「地域の誇りだ」と話された。とても田舎だったが、みな良い学校・地域の誇りと話した。

私は、良い学校とはいいコミュニケーションができてい学校だと考えている。時々、「札幌聾学校は、どんな学校か」とタクシーの運転手に聞くことがあるが、「わからない」と言われることが多い。それ以上に「場所も分からない」と言われる。歴史があっても認知がないと感じた。

次に、良い学校には何が必要か。聾学校は子供にとって12年も過ごす大切な場所。聾教育・聾学校のビジョンをもち、子供の成長に目を向けると共に、卒業生の意見・感想を聞くことも大切。みんなで納得して改築構想を練ることが大切。

2. ろう学校の専門性を活かした施設・設備とは

聴覚障害児には、音の他、視覚も大切。教室環境や子供の障害に配慮しているか常に見ていく必要がある。最近の欧米の学校は、ループやFMシステムのない学校がある。少人数学級が増えてきたので、必要がなくなってきたため。しかし、一番良いのは先生の声を補聴器でダイレクトに伝えることだと言われている。しかし、実際はとてもお金がかかる。聾学校は40dBをキープせよと言われるが難しい。静かな環境作りが大切なので、吸音材を敷き詰める必要がある。それを考えると、木造校舎はよい。鉄筋にすると声が反響する。高い音が反響してしまうので、全校一斉に窓にカーテンをしたところ、音が柔らかくなった。

長野は1枚ガラスですか。これだと高い音が反響する。防音性も大切。防音のためには、2重窓がよい。2重・3重窓がよい。布も効果がある。吸音効果・防音効果をしっかり考えることが大切。

3. 設計する際の配慮

・小さい子供や小・中・高の活動にあった設計が必要。通常の幼・小・中・高も参考に。また、子供や教師以外にも、初めて聾学校に来る親を温かく迎える必要がある。聾学校は心配りができないといけな。親や子供の気持ちを思いはかれれば、教育効果もあがってくる。

応接室や、お母さんが話し合う場・個別でゆっくり話せる場も大切。外国には個別の部屋がある。また、聾学校は耳のケアが大切。聴力検査室は学校の心臓部。

また、聾教育の中では、手話・口話だけでは難しい。教材が使いやすいような環境作りをするために、教材室も必要。物置にしないように。

子供の教育環境には、読書環境が大切なので、いろいろな場所に図書がある自由な空間を作って欲しい。

また、多目的使用な部屋も未来を考えて作る。

学校は、地域の方にどうやって施設・設備を使ってもらうかも考えなくてはならない。また、聴覚障害者の支援ができないといけない。聾学校は早期教育を行っているので、今までの活動プラス でのよい。

玄関は、幼稚部・小・中は別がよい。発達段階に応じて。幼稚部の遊具は小学部が使えないようにしてある学校もある。

札幌の場合、聴覚障害者センターが一番お金がかかった。外部の騒音を防ぐため学校の内部、中校舎側をセンターにした。またゴムマットをはり浮き教室にした。聴力検査室は自分が担当した。よい部屋になったが、隣の部屋が何かまでは考えなかったため、ボイラー室が来てしまった。自分の担当ばかりではなく、それぞれの部屋についても考える必要があった。

教員は建築の専門家ではないのでわからないことが多い。そこで、工事関係者の許可を得て、作っていく途中の学校を見ることも大切。まめに話す。「階段は木目に。」「黒板はたくさん。」というように。中学部以上になると教科の先生が代わるので配慮が必要。アメリカで、3面全て黒板という学校もあった。



多目的室で給食を食べたり、会議の場所にしたりもする。みんなが集まる部屋も必要。FMシステムも必要。しかし、札幌聾学校は図書館がない。これは問題。幼稚部だけの部屋も必要。合同で活動するので。

聴力検査室は、発達段階で検査器具が異なる。一番満足度が高かったのが、エアコンを入れたこと。湿度を嫌うため。機器が集中する部屋は湿度・温度管理を。

次に、筑波大学附属聴覚特別支援学校の様子を紹介します。聴力検査室。学校でデジタル補聴器の調子が見られるようにする必要がある。乾燥機の簡単なものや、イヤーマールドの乾燥機を各教室に準備。5000円くらい。聴力検査室に機材を入れすぎて反響することもあるので注意。

体育館ではマイクを持っていると片手が使えない。両手使えるマイクを使うとよい。

沖縄聾学校は、コンクリートだったので、聴力検査室の壁にフェルトを貼ったそうです。

ドイツのサムエル・ハイニッケ聾学校では、学校に機械は設備し、職員を何校も巡回させることができる。ゆっくり職員と関われる部屋も大切。鏡も。聾学校には鏡が必要。発音指導・メンタルでも必要。

幼稚部は視覚情報が大切。自分の姿や顔を気にする子供になって欲しい。自分を振り返る時間が大切。鏡は大切。最近はおそろかになっている。テーブルに座ったときは、1分以内で話すことも大切。

アメリカの聾学校の場合は、言語的な遅れがある子どもの他、聞こえる子供も入っている。また、地域の方に食堂を解放している（有料）。子供の頃から人との交流に慣れるのもよい。

各教室にプロジェクターも大切。素晴らしいのは教材室。校舎の真ん中にセットされており、誰でも利用できる。教科によってはIT機器も。

イギリスの人工内耳センターでは、窓も音が反射するので、カーテンを閉め切る。窓側には蛍光灯は要らないということで、窓側の電球はなかった。

最近のIT機器をどう上手く使うか。新しい学校を作るには、子供が見やすく聞きやすいように。また、札幌聾学校の経験としては、作るときは、いろいろな地域のお母さんにアンケートをとった。我が子のことではないと回収率は悪かった。

小は中に、中は高に見学に行き、何が欲しいか話すとよい。

長野はマメにやっているようで嬉しい。情報発信は大切。地域の方にも進んでいる様子を紹介することが大切。すると、多くの方が喜ぶ。学校が新しくなると、いろいろ派生することがある。テレビ取材とか。地域の方に協力してもらい、学校の様子もよく知らせていく。

卒業生の参画も大切。全国的に、教員は人事異動があるため、最終的にはいなくなる人が多い。そこで、卒業生に入ってもらうことも大切。卒業生のパイプも大切。

校舎改築の年、札幌は全国の研究会があった年で、校舎だけ新しくなってもと言われた。公開の必要性もある。学校のことを紹介するチャンスもある。ぜひ今のような取り組みを続けていって欲しい。あつという間です。ペースを守りながら頑張ってください。

また情報を得たら紹介したいと思います。質問にも答えます。無事校舎改築ができますようにお祈り致します。